

■（235）被災跡に残された「記憶の品」をたどります

東日本大震災から間もなく6年を迎える。高台の造成やかさ上げで宅地の完成が相次いでいる。きれいに整備された住宅地に住宅が再建され始めた。ただ、戦後高度成長期のニュータウンのような風景の登場は、被災の傷痕が隠されていくことの裏返しでもある。

津波で建物が壊されて土台だけ残った被災跡で、残されていた小物を拾って、持ち主を探している支援男性がいた。小物から震災前の「普通の暮らし」に思いを寄せる。かさあげなどで工事が進むともう拾うことができなくなると、震災3カ月後から東北3県を回った。自宅で保管してきた小物は、コップや皿、トランプ、写真、ぬいぐるみなどさまざま。例え何の変哲もなくとも、持ち主には思い出がある。捜せるならば、持ち主に返却したいという、この男性の手伝いをすることにした。そして、持ち主が見つかったなら、「この6年間」について直接、取材してみたかった。

小物を手に被災地を回ると、不思議と持ち主にたどり着くことが多かった。その経緯を来週から朝日新聞夕刊2面で連載する。タイトルは「記憶の品をたどって」です。(山)